

令和 6 年 6 月 10 日現在

機関番号：87106

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00207

研究課題名（和文）金属製幡の基礎的研究 - 特に密教における灌頂道具としての用途と機能

研究課題名（英文）Basic research on metal banners: their uses and features as tools in Esoteric Buddhism

研究代表者

伊藤 信二（ITO, SHINJI）

独立行政法人国立文化財機構九州国立博物館・学芸部企画課・課長

研究者番号：00443622

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は金属製幡、特に「玉幡」と称される一群の作例について、真言密教における灌頂儀礼の道具という観点から調査と考察を行ったものであり、参考作品も含めて20件の作例を対象として取り上げた。このうち10件は真言の灌頂儀礼において用いられたことが判明し、あるいは伝来の状況からその可能性が高いと判断された。この場合2点で1セット、つまり一対をなし、また玉幡を懸ける龍頭と竿一対が同じ箱に同梱していたり、付属として伝わっていることが多い。一方で玉幡の名称や定義を有しながらも天台寺院に伝来した作例や天蓋の四隅に懸垂する作例も見出された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

金属製の幡は国宝や重要文化財、正倉院宝物などを除き注目されることが少なかった。同種の幡の中で特に「玉幡」と呼ばれる一群について、多くが真言密教の灌頂儀礼に用いられる道具類の中に見出されることに着目し調査研究を行った。その結果従来未発表の作例を複数例見出すことができた。またそれらを含む灌頂道具類が、ある地域において真言密教の中核的な役割を担っていたと思われる寺院に伝わる点も注目され、その伝来は地域における真言寺院の位相を示す物証ともいえる。一方で玉幡と称され、あるいは形式上その定義を満たす作例でも真言の灌頂に関係しないものもあり、その用途は幡の本来的な機能すなわち荘厳であると推測された。

研究成果の概要（英文）：Principal investigator conducted research on a group of metal banners of this type, particularly one called "Gyokuban," focusing on the fact that many of them are found among the implements used in the empowerment ceremonies of Shingon Esoteric Buddhism. As a result, Principal investigator found several previously unpublished examples. It was also noteworthy that the empowerment ceremonies implements, including these, were passed down to temples that are thought to have played a central role in Shingon Esoteric Buddhism in a certain region, and their transmission can be seen as physical evidence of the status of Shingon temples in the region. On the other hand, among the works called Gyokuban or that formally meet the definition, there are some that are not related to Shingon empowerment ceremonies, and it was assumed that their use was the original function of a banner, that is, to solemnly decorate.

研究分野：仏教工芸史 金工史

キーワード：金属製幡 金銅幡 玉幡 灌頂道具

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

幡は仏像や仏堂の内外に懸垂し、あるいは仏教的な儀式や行列において竿に吊るし捧持するなど、建造物や空間を装飾(仏教用語で「荘嚴」(しょうごん))する仏教工芸品のひとつである。幡は古代インドに起源を有し、仏教の文脈上で荘嚴具として用いる功德や積善が付与されるにおよび、仏教が信仰された地では盛んに制作・懸垂が行われた。日本には6世紀、朝鮮半島からの仏教公伝の際にもたらされている(『日本書紀』日本における幡の初見)。以後各時代を通じ、荘嚴具の一つとして制作され続け、現代に続いている。その大多数は染織の技法で作られた布帛製であるが、圧倒的に少数ながら金銅板(銅製鍍金)のように本体を金属で成形する金属製幡がある。最古例は東京国立博物館が所蔵する法隆寺献納宝物中の国宝金銅灌頂幡(飛鳥時代7世紀)であるが、それ以後も各時代を通して金属製幡は制作された。それがいかなる用途、機能を有するのか、また材質・技法・様式といった金工史の上で、個々の金属製幡はどのように位置づけられるのか。研究代表者はこれらについてかつて論考にまとめたが(伊藤信二「金銅幡 - 玉幡との関わりにおいて」『東京国立博物館紀要』第49号 2014年)その過程で特に真言密教における灌頂道具としての玉幡の役割が浮かび上がった。すなわち東寺における長保二年(一〇〇〇)結縁灌頂の例を初出に二旒一對の玉幡が真言密教における灌頂の記録に散見されるようになり、その玉幡は平安時代後期には本体金属製、手足などにガラス玉を連続するという形制となり、中世以降特に真言の灌頂道具として一對の玉幡が用いられることが定着したと推測した。

2. 研究の目的

本研究は先の論考において提示したこの推論を、現存作例のさらなる調査分析を通して、一層明確にしようとするものであった。本研究では、真言密教における法脈の師子相伝の儀式である灌頂儀礼の場で使用される道具としての玉幡について、現存作例の調査と分析を行うとともに、先の論考で収集した史料も援用しながら、玉幡の実態と役割を明確にしようとした。また対象とする時代は、平安時代12世紀~江戸時代18世紀にわたるため、この間の金属製幡の形式上の変遷や、あるいは金工史的視点から材質・技法・様式の定置を行うことを企図した。金属製幡については、国宝や重要文化財、正倉院宝物などを除けば従来ほとんど注目されていなかった分野であり、新たな作例の発見なども期待された。

3. 研究の方法

以上の問題意識に立脚し、以下を実施した。

金属製幡およびこれを含む灌頂道具の実見調査(過去に調査実績のある資料)

金属製幡およびこれを含む灌頂道具の実見調査(過去に調査実績のない資料)

研究実施中に得られた所在情報に基づく新出資料の実見調査

~ のデータ整理と分析

なお実見調査とは以下をいう。

ア)資料の基本データの取得(材質・形状・構造・技法・加飾・銘文・保存状態・付属品)

イ)資料の画像データの取得(全部・部分・銘文・付属品)

ウ)関連資料の取得(文書記録・口承伝承・儀礼行事)

4. 研究成果

【作例①】玉幡(金銅透彫幡)二旒一對 室町時代 文明十七年(一四八五)・延徳四年

【作例②】玉幡(金銅透彫幡)二旒一對 室町時代 十六世紀 静岡・尊永寺

【作例③】玉幡(金銅透彫幡)二旒一對 室町時代 箱に文明十五年(一四八三)墨書 十五~十六世紀 大阪・観心寺

【作例④】玉幡(金銅透彫幡)二旒一對 室町時代 箱に永正十四年(一五一七)墨書 滋賀・舎那院

【作例⑤】玉幡(金銅透彫幡)二旒一對 大永三年(一五二三)銘 新潟・乙宝寺

【作例⑥】玉幡(金銅透彫幡)二旒一對 大永六年(一五二六)銘 東京国立博物館

【作例⑦】玉幡(金銅幡)二旒一對 江戸時代十七世紀か 栃木・覚本寺

【作例⑧】玉幡(金銅透彫幡)二旒一對 江戸時代十七世紀 奈良・法隆寺

【作例⑨】玉幡(金銅透彫幡)二旒一對 江戸時代十七世紀 京都・三千年

【作例⑩】玉幡(金銅幡)二旒一對 江戸時代 宝永二年(一七〇五)千葉・宝金剛寺

【作例⑪】玉幡(金銅透彫幡)二旒一對 江戸時代 箱に享保五年(一七二〇)墨書 千葉・観福寺

【作例⑫】玉幡(金銅透彫幡)二旒一對 江戸時代十八世紀 京都・縁城寺

【作例⑬】玉幡(金銅幡)二旒一對 江戸時代十八世紀 千葉・宝金剛寺

【作例⑭】玉幡(金銅透彫幡)二旒一對 江戸時代十八世紀 千葉・観福寺

【作例⑮】玉幡(金銅透彫幡)二旒一對 江戸時代十八世紀 京都・醍醐寺

【作例⑯】玉幡(金銅透彫幡)二旒一對 江戸時代 文政六年(一八二三)山形・慈光明院

- 【作例】金銅幡 二旒一对 江戸時代 箱に正徳四年(一七一四)墨書 千葉・宝金剛寺
 【作例】玉幡(金銅透彫幡・天蓋幡か) 四旒一組一对 江戸時代 寛永九年(一六三二)朱漆銘 大阪・観心寺
 【作例】金銅幡(天蓋幡) 四旒一組 江戸時代十八世紀 埼玉・広徳寺
 【作例】春日宮曼荼羅彩絵舍利厨子 室町時代 文明十一年(一四七九)銘 東京国立博物館

これらについて主に真言密教における灌頂道具という観点から検討を行った。

作例 は真言の灌頂儀礼において用いられたことが判明するもの、あるいは伝来の状況からその可能性が高いものと考えられる。この場合、必ずしも玉幡と同時代の制作物とは限らないが、玉幡を懸ける龍頭と竿が同じ箱に同梱していたり、付属として伝わっていることが多い。史料によれば「六日、未剋許参円宗寺、是覚行法親王依可被行結縁灌頂也(中略)前庭讚花机敷堂童子座、又立龍頭竿棹懸玉幡、其前十二天候之、親王啓白之詞以優妙也(後略)」(『大日本古文書 中右記四』康和五年(一一〇三)十二月六日条 八九頁)とあり、玉幡の材質は不明であるが、十二世紀初期に灌頂儀礼で玉幡を龍頭と竿に懸けていた例がある。「醍醐寺三宝院并遍智院灌頂道具絵様寸尺等」(永仁四年=一二九六)にも、玉幡に用いる龍頭が描かれている。また作例 の尊永寺、の観心寺、の舎那院、の宝金剛寺、の縁城寺、の観福寺など、地域において真言密教の中核的な役割を担っていたと想像される真言寺院に伝来している点も注目される。真言密教において師位を継承する印可を与える最高の威儀である伝法灌頂は平安時代には高位の身分者に限られていたが、鎌倉時代以降は地方でも行われるようになったとされる。例えば作例 が伝来する宝金剛寺は江戸時代初期には伝法灌頂を行なう真言道場と位置付けられており、慶長十三年(一六〇八)十月七日に第十四代住職の覚朝が覚尊に付法を行っている(「宝金剛寺覚朝授尊印信紹文」愛知・真福寺蔵)。こうした玉幡や灌頂道具の伝来は、地方における中核寺院という位相を示す好例といえるであろう。

一方で本体に玉幡と明記し、かつ年記を有する最古例である作例 が伝わった因州仙林寺は、当時天台寺院であった。また作例 が寄進された当時の乙宝寺は天台宗であったようである。作例 の三千院蔵品は一对の龍頭・竿を伴っており、真言における灌頂道具の玉幡の在り方と似ている。ただし現在のところ、天台の事相や史料において灌頂道具に玉幡が用いられたとする事例を見出せていない。旧仙林寺玉幡の「常行堂玉幡」という銘記が天台寺院であることを物語るわけであるが、その常行堂においてどのような使われ方をしていたのかは不明である。

また二旒一对の玉幡の全てが灌頂道具の一部であったわけではなく、仏堂や宮殿に懸垂する純粋な荘厳具としての役割をするものもあったと思われる。作例 の乙宝寺蔵品は同時代の金銅華鬘とともに寄進されたものである。作例 の法隆寺蔵品は、貞治三年(一三六四)築造された宮殿(大厨子)の正面軒先左右に、近年まで一对で懸垂されていた。建永元年(一二〇六)ごろ修復がなされた東大寺二月堂観音厨子の関係者の周辺で、「観音ノ御厨子ノ幡華鬘並二宝幢奉レル浄空法師」「観音ノ御厨子ノ玉ノ幡並二宝幢ノ勸進ノ僧寛玄」「観音ノ御厨子ノ玉ノ幡二流施入セル比丘尼聖阿弥陀仏」の記述がみられる(『東大寺上院修中過去帳』)。観音の厨子の荘厳具として、華鬘や宝幢などとともに二旒の玉幡が施入されていることに注目したい。玉幡二旒を宮殿や厨子の開口部などに懸垂するという事は、わりあい早くから行われていたと推測される。春日宮曼荼羅彩絵舍利厨子(東京国立博物館)は室町時代・文明十一年(一四七九)の年記銘を有する作品であるが、これには二旒の小型の金銅幡が付属しており、金工から見て厨子と同時代と判断される。幡身の形状は玉幡に通例のものであり、幡手の一部にガラス玉が残存し、また幡身の下縁にも穴があげられていることから、玉幡とみなしてよい。

本研究では本体が金銅製で幡手や幡足にガラス玉を連続した玉幡について主に真言密教における灌頂道具という観点から調査と分析を行った。おそらくまだ未発見、未発表の作例は少なくないと思われ、地方において中核的な役割を担った真言寺院から、今後玉幡をはじめとする灌頂道具の古例が見いだされることが期待される。また研究の過程で、作例 のように、形制としては玉幡に該当するが在り方としては天蓋幡と推測される例、作例 のように玉幡の形制をとらない天蓋幡の例にも遭遇した。この観点から、改めて寺院に伝来する金属製幡を見直す意義もあると思われる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計2件

1. 著者名 京都国立博物館	4. 発行年 2022年
2. 出版社 京都国立博物館	5. 総ページ数 172
3. 書名 『河内長野の霊地 観心寺と金剛寺 真言密教と南朝の遺産』	

1. 著者名 奈良国立博物館・東京国立博物館	4. 発行年 2021年
2. 出版社 読売新聞社	5. 総ページ数 366
3. 書名 聖徳太子と法隆寺	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------